

## はじめに

シベリア抑留（抑留地は狭義のシベリアに留まらないのでソ連抑留と言うべきだが、通称に従う）は、二〇〇〇を超すとされる回想記の多さに比して学術的研究が少ない。ペレストロイカ期から始まったロシア人による研究を別とすれば、日本人による研究は長らく、パイオニアである若槻泰雄の著作をはじめ、主として引揚援護庁作成文書と回想記をベースにしたもので、基本資料である旧ソ連の公文書を利用し始めたのは最近一〇年余りのことにすぎない。ソ連崩壊で公文書閲覧がある程度まで可能になったのは一九九二年だったにもかかわらず、である。ロシア連邦国立公文書館に所蔵されている内務人民委員部／内務省の日本関連抑留基本文書ファイルを最初に利用したのは筆者だが、それは二〇一一年のことであった。<sup>②</sup>

抑留研究のもう一つの弱点は、抑留者（被抑留者）の帰国後の生活や運動について、個々人の回想記以外に見るべき著作がない点である。<sup>③</sup> 彼らは在ソ中に受けた政治教育により、とくに舞鶴帰還時の一部抑留者による過激な言動により「アカ」と見られ、さらには戦後復興とともに、五十嵐恵邦の言うように「忘れたい戦争体験を持ち込む」他者として疎まれるようになったため、<sup>④</sup> 語られることが少ない。彼らの生活史は余りにも多様で無理だが、運動史の再構成も、資料の散逸、指導者の高齢化に

より、これまた難しくなっている。

この困難な現状を打開する第一歩が、長澤淑夫『シベリア抑留と戦後日本——帰還者たちの闘い』であった。それは抑留帰還者の運動、とくに労働補償要求の運動を政府や裁判所の対応（無視と否定）との関係で描き、国家の戦争責任と戦後責任を問うた労作である。ただ、資料の関係もあつてか、全国抑留者補償協議会（一九七九年結成）の運動に重点が置かれ、初期の運動については叙述が少ない<sup>5)</sup>。なお、ロシア人研究者の中では、全抑留者藤六郎会長の秘書を務めた日本通のカタソーノヴァが、抑留帰還者の運動を初期から叙述している。先駆的意義は認められるが、当然のことながら邦語文献の利用が限られ、分析としても十分ではない<sup>6)</sup>。

筆者は国立国会図書館で一九四五—五〇年の新聞、雑誌を渉猟し、帰還者団体の機関紙についても「プランゲ文庫」（同憲政資料室）で、ある程度まで閲覧することができた。機関紙類が欠けている、または一部しか残存していない団体については、主要リーダーの回想で補っている。

この作業を進めていくうちに、初期の運動を冷戦進展の文脈の中に、抑留者の総数や死亡者数をめぐる、日本送還の遅れをめぐる米ソの対立とその報道との関連で位置づけるべきことがいっそう明確になった。筆者としては、従来ある程度まで進めてきた旧ソ連公文書の閲覧が不十分であることに気が付き、「民主運動」の実態や送還の実情、ソ連と日本共産党及び同党系の帰還者団体との関係などに関してロシア諸公文書館で新たに資料を見出し、さらに抑留全体につき従来の認識を深める資料も得ることができた。

本書は四章から成っている。第一章「シベリア抑留概観」は序論に当たり、叙述は「抑留者たちの

戦後」というテーマに必要な前提に限った。むしろ「必要な前提」以外でも、ソ連の国家防衛委員会（戦時の最高決定機関、一九四五年八月二三日の決定により日本軍将兵はソ連に連行）の議事録やその他の公文書から得られた新たな知見は加えることにした。「前提」の方では、一九四九年半ばからの抑留者総数をめぐる米ソ対立が、多分に米国側の意図的な過大発表によるものだったことを明らかにしている。他方、送還の遅れは、日本が送る引揚船が少ないとか、積載人員を限っているとかいうソ連側及び「民主運動」アクチヴ（積極分子）の宣伝とは裏腹に、各地収容所から送還港ナホトカへの輸送が停滞していたこと、さらには極東のソ連当局が労働力の減少に抵抗したことに主として起因していた実情を示している。従来の抑留研究にしばしば見られたイデオロギー的偏見、冷戦的思考の残滓は、公文書の実証的分析によって今後とも克服されていくだろう。

第二章「抑留報道と帰還者運動」は新聞・雑誌、とくに抑留問題に当時から熱心だった『毎日新聞』の報道を分析し、衆参両院の引揚問題特別委員会及び衆院考査特別委員会の速記録（インタビューで閲覧可能）から重要な人物の証言を再現した。冷戦亢進下での引揚をめぐる保守派と共産党系の対立を浮き彫りにし、「徳田要請」問題と菅季治証言を総合的に分析した初めての試みと自負するものである。四半世紀前に澤地久枝は『私のシベリア物語』で、菅の証言及び生き方を現地取材まで行って活写したが、筆者のそれは政治史的解釈に徹している。また、帰還者・家族の運動は、共産党系は次章に回したが、保守派は全協（在外同胞帰還促進全国協議会）を中心に、学生同盟や健青会といった支援団体も初めて組み込んで、この章で系統的に分析した。

第三章「日本共産党と帰還者運動」は、一九五〇年六月の共産党の分裂と非合法化により文書が十

分に残されておらず、困難な作業だった。しかし、『アカハタ』『前衛』を丹念にフォローし、近年出版された『戦後日本共産党関係資料』<sup>⑨</sup>の党内文書を利用した。ソ連帰還者生活擁護同盟については機関紙を用い、後継の日本帰還者同盟は機関紙がないため、右資料集の党内文書と公安機関である法務府特別審査局『特審月報』の叙述、生存している元中央委員二人へのインタビューを資料とした。ここでは旧ソ連の公文書も併せ検討し、日本共産党がソ連の指示どおり動いたとは必ずしも言えないことを明らかにしている。

第四章「シベリア抑留者群像」は、ソ連エージェントとなった抑留者、ソ連に残留を余儀なくされた抑留者、そして抑留史にとって重要な証人をややエッセイ風に描いた。前二者のテーマは初めての試みである。高杉一郎、内村剛介、高橋大造は優れた文才を持ち、高杉は『極光のかげに——シベリア俘虜記』、内村は『生き急ぐ——スターリン獄の日本人』という不朽の名著を残し、高橋も未刊の遺作を持っており、三人は筆者が抑留研究に着手し、推進するモチーフを与えてくれた人物（故人）でもある。

筆者はスターリン体制、ついで日ソ関係史をテーマとしてきたが、今回は素人ながら日本政治・社会史に立ち入ることになった。本書が、シベリア抑留史と戦後日本史の研究にいささかでも貢献できればと思う。

なお、本書脱稿直前に長勢<sup>ながせ</sup>了治『シベリア抑留全史』が刊行された。在野の研究者として長年の仕事を集大成したもので、ロシア公文書館を利用してはいないものの、ロシアの研究書、資料集も渉獵しており、よくまとまった労作である。但し、スターリンによる抑留、「民主運動」を断罪するあま

り、これに抵抗した将校たちを「サムライ」として評価するなど、関東軍の行動と日本の満洲支配を、「大東亜戦争」さえも正当化しかねない論調は首肯できない。<sup>10)</sup> 本書はこれを直接には取り上げないが、右批判の趣旨は読み取っていただけるものと思う。